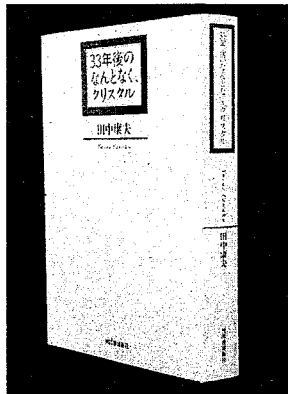


33年後のなんとなく、クリスタル

田中康夫著

河出書房新社 1600円



1956年誕生。お橋大とで
80年『なん』
クリスタル
受賞。

評・宇野 重規 (政治学者
東京大教授)

「なんとなく気分のよいものを、買ったたり、着たり、食べたりする」「なんとなく気分のいい、クリスタルな生き方ができそう」。そんな終わり方をする小説の、三三年後の続編である。それも著者らしき人物を思わせる「僕」が、かつての作品の登場人物であった女性たちと再会し、来し方と近況を語り合う。モデルのアルバイトをし、ミュージシャンの彼氏と暮らしていた女子大生は、いまや外資系企業につとめ、世界の貧困を前に、自分のなすべきことを模索する成熟した女性へと変貌している。

もちろん、変わっていない部分もある。登場

黄昏の官能と批評性

人物たちは洗練された会話や食事を楽しみ、そこには多数のブランド名が登場する。三三年前の「もとクリ」のときと同じく、表層的な人間関係や会話を描いただけの風俗小説という批判も出てくるかもしれない。

とはいえ、主人公たちはけっして変わったわけではない、変わったのは日本社会だと、著者は主張しているようにも思える。かつて自分らしい快適さを求めた彼女たちは、その延長線上に、いま、自分たちなりに社会に対してできることを考えている。これに対し、日本社会の方がむしろ自らを見失い、危うい方向に走り出しているのではないかと。

読み応えがあるのは、やはり膨大な註である。おびただしい情報と自己批評性に満ちているのは同じだが、今度の「いまクリ」の註はより政治的である。「もとクリ」が出生率の註で終わっていたのを受け、六〇〇〇万人の日本社会を展望するかと思えば、著者の国会での質問や知事としての行動を振り返り、先日亡くなった経済学者の宇沢弘文への思いを展開する。

小説の終わりには「黄昏」という言葉が出てくる。「クリスタル」から「黄昏」へ。しかし、著者はけっして枯れていない。薄暮のなか、他の境界がぼやける瞬間の官能と、先鋭な社会批評性が一体になった作品である。